



## 核燃料サイクルからの撤退を！

早川 光俊 (CASA専務理事)

政府の高速炉開発会議は、11月30日、高速増殖原型炉もんじゅに代わり、高速実証炉を国内に建設するとする方針「『高速炉開発の方針』の骨子(案)」を発表しました。今後10年以内に高速実証炉の基本設計や開発体制を固めるとしています。

### 夢の原子炉「もんじゅ」？

原子炉開発は、実験炉、原型炉、実証炉を経て商業炉で実用化されます。高速増殖炉の場合、実験炉が「常陽」で、原型炉が「もんじゅ」です。今回発表された高速実証炉は、もんじゅの後継炉とされていますが、高速増殖炉と高速炉ではまったく目的が異なります。

表 もんじゅの歴史

1994年4月	初臨界
1995年8月	発電開始
同年12月	ナトリウム漏洩事故
2010年5月	運転再開
同年8月	炉内中継装置落下事故
2012年11月	1万件の点検漏れ発覚
2013年5月	原子力規制委員会が試験運転再開準備停止命令
2015年11月	原子力規制委員会が、新たな運営主体の検討を勧告

日本の原発政策は核燃料サイクルを基本とし、その中核的な設備が原型炉のもんじゅとされてきました。高速増殖炉は、原発の使用済み燃料を再処理したプルトニウムとウランを混ぜた燃料を増殖炉で燃焼することにより、投入した以上のプルトニウムが取り出せることから「夢の原子炉」とされてきました。

高速増殖炉と異なり、高速炉はプルトニウムを燃やすだけの、放射性廃棄物の処理炉です。

### トラブル続きの「もんじゅ」

1960年代に計画された「もんじゅ」は、1992年に試験運転を開始してからトラブルを繰り返してきました。1994年4月に初臨界を達成しましたが、1995年12月には二次系統の冷却剤のナトリウムが漏洩し、火災を発生させる事故が起こり、さらに事故発生直後の現場のビデオ隠しも発覚し、長期の停止を余儀なくされました。2010年5月ようやく運転を再開しましたが、8月には炉内中継装置の落下事故が起こり、また停止してしまいます。2012年11月には1万件近

い保安規定に基づく点検漏れが原子力規制委員会により公表されました。2013年には非常用発電機などの重要機器で13の点検漏れ、虚偽報告も見つかり、原子力規制委員会は無期限の試験運転再開準備停止命令を出しています。2015年11月に、原子力規制委員会は、日本原子力研究開発機構に代わる運営主体を明示するよう文部科学大臣に勧告していました。

### 破綻している核燃料サイクル

もんじゅは1992年に試験運転を開始してから、稼働したのは5300時間(約221日)に過ぎず、発電したのはわずか883時間(約37日)とされています。一方、これまでかかった費用は1兆円を超えています。

高速増殖炉は、これまで実用化されたものはなく、事故やコスト、技術的な困難さなどからフランス、ドイツ、イギリス、アメリカなどは撤退し、現在も固執しているのはロシア、中国、インドそして日本などに過ぎません。

日本政府が、核燃料サイクルに固執するのは、核燃料サイクルを止めると青森県六ヶ所村の再処理施設が必要なくなり、青森県との取り決めで六ヶ所村に保管されている使用済み核燃料をもとの原発に戻さざるを得なくなり、多くの原発が使用済み燃料の貯蔵で満杯になり、稼働できなくなることを懸念しているためだと言われています。

もはや、核燃料サイクルを維持することは不可能だと言わざるを得ないと思います。これまでもんじゅの開発にかかった費用の87%は税金です。これ以上、破綻した核燃料サイクルを続けることは、福島原発事故の処理も合わせて、次世代に重い負担を残すこととなります。核燃料サイクルは今すぐ撤退すべきだと思います。